



TITLE:

朝鮮經濟の近代化に就て

AUTHOR(S):

堀江, 保藏

CITATION:

堀江, 保藏. 朝鮮經濟の近代化に就て. 經濟論叢 1943, 56(5): 552-563

ISSUE DATE:

1943-05

URL:

<https://doi.org/10.14989/132003>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號五第卷六十五第

月五年八十和昭

論叢

利子に於ける勢力……………

文學博士 高田保馬

資本形成過程の分析と貨幣需要……………

經濟學士 中谷實

支那私幣考……………

經濟學士 穗積文雄

ヒックスの資本理論……………

經濟學士 青山秀夫

研究

地方貿易統計の問題……………

經濟學士 有田正三

說苑

朝鮮經濟の近代化に就て……………

經濟學士 堀江保藏

附錄

彙報

說苑

朝鮮經濟の近代化に就て

堀江 保藏

は し が き

去る三月、命ぜられて朝鮮及び滿洲國へ出張し、その經濟事情を見聞するの機會を得た。出張の目的は、固有の朝鮮及び滿洲の經濟と、主として我國の手によつて近代化せられた新しい經濟との接ぎ目はどのやうになつてゐたか、換言すれば經濟近代化のための諸條件がどこまで整つてゐたかを調査するにあつた。朝鮮に於ても滿洲に於ても、また我國自身に於ても、經濟の近代化が所謂育成政策に俟つところが大であつた點では同一であるが、その近代化自體は、固有の經濟がそれまでに到達せる發展段階の相違に應じ、また近代化を要請せられた時代の相違に應じて、夫々特殊性を具へてゐるやうに思はれる。かくて右の接ぎ目を歴史的に研究することは、夫々の近代經濟の特質を理解するに役立つのみならず、政策を樹立する上にも資するところが少くないであらう。

かゝる研究は、一旅行者の到底なし得るところでないのは

勿論、既に先學の貴重なる研究も幾多存する。然るにも拘らずこの拙文を草する所以は、現地に於ける見聞が、私をして先學の諸説に對する一定の理解に到達せしめたからに外ならぬ。元々見聞のまゝを記すべきであるが、そのまゝ記し得ざるところ少なからず、試みに稍々體裁を整へて發表することゝした。私の誤聞に基く立論あるを恐る。切に先學の叱正を乞ふ。

尙ほ滿洲經濟に關しては、次の機會を待つて一言したいと思ふ。

一 封建制度の存否

朝鮮經濟の近代化の端緒が、明治九年の江華條約に基く開國にあることは、異論がないところであるやうに見える。そして近代的生産業が朝鮮に根を下ろすまでに、其後更に二十餘年の歲月を俟たねばならなかつた。然らばその頃の、李朝末期乃至は韓國時代の朝鮮固有の經濟組織は如何なるものであつたか。

既に明治三十七年、福田博士は朝鮮に於ける封建制度の缺如を指摘し、その發展段階を我國のそれに擬して、鎌倉幕府發生以前、殊に藤原氏時代に比すべきか

とせられ、黒正博士は、舊來の朝鮮經濟が長期に亘つて幼稚なる且つ變態的な都市經濟時代のまゝ停滯を續けた最大の原因として、封建制度の缺如を擧げて居られる。發展段階の規定に相違はあるも、封建制度の缺如を指摘する點に於ては、兩博士の見解はまさに一致してゐる。

これに對し、近時城大の鈴木教授は、朝鮮社會が、收租權者としての非近代的土地所有者階級、これに隸屬する農奴的な多數の耕作農民、及び國王に隸屬する單なる耕作權者に過ぎぬところの所謂自作農民から形成されてゐたことを擧げて、封建的構造と呼ぶことは決して突飛ではないであらうとし、但し、西歐や日本に發達した封建制度と區別するために、特に『アジア的封建制』と呼んでもよい、と述べて居られる。其他朝鮮固有の經濟に對して『封建的』なる形容詞を附してゐる學者は少くない。

鈴木教授の所謂收租權者は、主として兩班に屬する貴族階級を指すのであらう。これとその隸屬農民、及

び土地の最高の所有權者たる國王とその耕作農民、此等が社會を構成してゐたことを以て封建社會といふならば、同様の組織を持つ我が王朝時代も封建制度の時代と呼ばねばならぬであらう。私は福田・黒正兩博士に従つて、朝鮮に封建制度の時代が無かつたことを強調したい。李朝末期の諸々の經濟現象に『封建的』なる形容詞を無批判に附することを躊躇したい。福田博士の藤原氏時代に比すべきかとの段階規定に對しては、城大の四方教授も同感であつた。更に當時朝鮮には、貴族の許に多くの家内奴隸或は奢侈奴隸がゐたのであるから、平安時代の段階に交ゆるに、奈良時代の段階を以てしたものといふ方が、より正確ではなからうかとさへ思つてゐる。

兩班は文班・武班の總稱である。その祖先は、南方に於ては智力上の優者たり、北方に於ては武力上の優者たりしものが多かつた。李氏自身は、北方——咸鏡南道——出身の武將であるが、他に有力なる武將が起つて自己の地位を脅かさんことを恐れ、常に北方人を

- 1) 「韓國の經濟組織と經濟單位」(經濟學全集、第四卷)
- 2) 「朝鮮の經濟組織と封建制度」(經濟史論考收載)
- 3) 「朝鮮の經濟」54—55頁

抑壓するの策を講じ、政治を行ふ上に武班よりも文班を重用した。これ北方人がその精力をむしろ經濟の方面に伸ばさんとした原因であり、開城・平壤が商都として他の都市よりも比較的に發達した原因であるが、普通に封建社會の中心をなしてゐる武將の勢力が薄弱であつたこと、並に彼等が文臣の下位に甘んじて貴族化してゐたこと、これも朝鮮に封建制度が缺如してゐた一つの證據ではなからうか。

更に福田博士は、前掲書に於て『韓國の社會組織に於て單位たるの地位と資格とを有するものは兩班と名くる貴族あるのみ』とし、隸民である中人並に常民に至つては『何等の結合、何等の團集に於ても單位を形成するを得ざるものなり』といひ、進んで『若し彼等が集合して社會的の意義あるものならば、それは極めて幼稚なる意味に於ける小組織のみ』洞、里の村落は是れなり大組織中の單位にはあらざるなり』と述べて居られる。鈴木教授が『地縁の共同體としての農村共同體的諸關係は頗る強固に保存せられ、面・洞及び里の部落自治組織

として發達してゐた』といひ、或は『部落内に於ける農民相互の關係は殆ど階級分化の發達を見ず、それ自身で所謂「小宇宙」をなしてゐた』と述べて居られるのは、福田博士とその見解を異にせざることを示すものと考へてよいであらう。此等の見解を更に敷衍すれば、農村部落は、より小さい單位から成る構成體でもなく、またより大なる集團の構成要素でもなかつたといふことになる。尤もこの解釋の前半は、或は極論に失するかも知れぬ。

かやうな村落共同體が到るところに存在してゐたばかりでなく、最も原始的な血縁共同體的社會關係も、宗中或は門中の制度に於て尙ほ殘存してゐた。これを表示するものが李とか金とかの、多く木・火・土・金・水の五行説に基いて名付けられた姓である。福田博士は、姓は *Shamma* に該當するものなるべしとなし、韓國には個人の存在せざるのみならず、我國にて所謂戸も存せず、従つて家庭も之れなしと述べて居られるが、今次の旅行で面接した人々の意見を綜合すると、今日でも

日本流の家庭なるものは、未だ立派に出来上つてはゐないやうである。

以上のやうに部落集團や血縁集團のことをあれこれ考へると、我が封建時代に家が頗る重んぜられたことを思合せて、感慨に堪へざるものがある。

個人も存せず戸も存せずといつても、部落の全住民が、或は同一血縁に屬するもの全部が、一つ所に一つ家に住つて共產的な生活をしてゐたといふのではない。個人又は戸が法制上・社會組織上獨立の人格を確然とは持つてゐなかつたといふだけであつて、父母・夫婦・子弟など近親關係にあるものが、いはゞ所帯をなして生活を營んでゐたことは勿論である。そしてこの世帯の生活は大體に於て自給自足的であつた。この事は多くの文獻に見えてゐるが、ビュッヒャーが引用するところのボギオ著『朝鮮』(一八九五年版)にも『朝鮮人は生活に缺くべからざる品物を得るためにのみ勞働する萬能手工業者である』と書かれてゐる。

然り、生活必需品を得るためにのみ勞働するのであ

つて、原則として販賣の目的を以て農業に従事し或は手工業品を生産するのではない。併し乍ら自ら生ずる餘剰産物と、必ずしも自給出来ない生活用品との交換が行はれねばならぬ。その機關はあらゆる都邑に目を定めて開催される市である。外國貿易が發達するまで、市に持出された品物は穀物・禽畜・魚類・銅鐵眞鍮器・陶磁器・各種の農具・筆墨紙・笠子・鞋履・冠・烟管・薪炭・布・木綿・綿絲・綿・皮革などの農産物又は農村手工業製品にして、低度の生活必需品であつた。従つて市に出る者は農民自身であつて、貨幣による交換も行はれたが、物々交換も盛んであつた。この市取引の盛んな狀態に着目して、黒正博士は朝鮮經濟の發展段階を低度の都市經濟時代と規定せられたのである。市場を訪れるものには市場商人もあつた。市では品物の交換・賣買のみならず、貨幣の貸借も行はれた。更に京城・開城・平壤の如き大きな都會には店舗を設くる坐商もあつた。また『客主』・『旅團』と稱する問屋的機能果せる商人や、『居間』と呼ぶ仲立人もあり、

5) Bücher, K.; Die Entstehung der Volkswirtschaft. S. 94. 脚註
6) 市に就ては善生永助氏「朝鮮の市場經濟」、四方教授「市場を通じて見たる朝鮮の經濟」、文定昌氏「朝鮮の市場」参照

商都開城では『契』と稱して卸賣商人のギルドが結ばれ、自己防衛手段に供せられてゐた。而してこの商人による商業の組織は極めて複雑であつた。

上述の市場取引が頗る旺盛であり、而もそれが農家の餘剰生産物の交換といふ範圍を遠く出づるものでなかつたことは、生産・分業の未發達を物語るものであらう。更に商人商業が活潑且つ複雑であつたことも、崔虎鎮氏の述べるが如く、社會の一般的な經濟の發達と逆比例をなすものと見てよいであらう。

この市や商業の發達に着目すれば、李朝末期乃至韓國時代の經濟を我が平安時代になぞらへることは無理かも知れないが、少くとも封建制度の時代と規定し、これを前資本主義の段階とすることは無理なやうに思はれる。強いて名づければ朝鮮の經濟を稱すべく、朝鮮の經濟はこの状態に於て停滯を續けてゐたのである。

二 經濟の近代化

京仁工場地帯や平壤附近の工場を見、清津や興南の

近代工場を見學し、或は赴戰江・長津江・鴨綠江の大發電所を見聞すると、朝鮮經濟の近代化乃至は朝鮮に於ける近代産業の驚異的發展に先づ驚嘆する。鴨綠江水電のダム建設工事の實況を映畫で見てさへ、工事そのものの規模の大きいことよりも、寧ろ畫面の背後に躍動する近代企業家のエネルギーに打たれる。

總督府發表の數字を見ると、始政の年即ち明治四十四年の總生産額參億八千萬圓のうち、農産額が參億圓以上即ち八〇パーセント餘を占め、工産額は千五百萬圓即ち四パーセント強に過ぎなかつたものが、滿洲事變の昭和六年には總生産額拾壹億貳千萬圓のうち、農産額六億七千萬圓即ち六〇パーセントに對し、工産額は貳億五千萬圓即ち二二パーセントに上つた。爾後更に工鑛業の進歩には顯著なるものあり、即ち昭和十五年には總生産額四拾八億圓のうち、農・林・水産物の價額が貳拾六億圓即ち五五パーセントを占むるのに對し、工鑛産額は實に貳拾貳億圓即ち四五パーセントを占めることになつた。農産物の増加速度にも顯著なる

ものがあるが、工産物のそれは誠に驚異的であるといはねばならぬ。

朝鮮經濟の近代化は、明治九年の江華條約に基く外國貿易、特に我國との貿易の開始に始まる。當初我國からの輸入品は歐米製品が大部分を占めてゐたが、兎も角も貿易の開始、その累年増加に應じて、朝鮮の鎖鎖的自然經濟は次第に國際經濟の中に織込まれ、農村の家内仕事の手工業は、漸次解體を餘儀なくせられた。これを促進したものは、明治九年に始まる三菱會社・日本郵船・大阪商船等の對朝鮮航路の開設、二十七年の日韓攻守同盟條約によつて我國が獲得せる鐵道敷設權に基くところの、三十二年以後の京仁・京釜・京義等の諸鐵道の開通、並に金融制度の改善、貨幣制度の整備などであらう。

右の二十七年は朝鮮に於て『甲午の革新』が行はれた年であるが、その内容は、文官武官等の尊卑の別を廢し、兩班と平民との法律上の差別を廢し、公私奴婢の典籍を廢して人身賣買を禁じ、租税の物納を金納に改

めるなど、古い姿の朝鮮社會を一舉に近代化せんとするものであつた。更に明治三十一年に着手せられた土地改革は、日韓併合後に至つて實現を見、大正七年に完了したが、これによつて近代的土地所有制度が確立し、現耕作者は多く土地所有から離脱せしめられたとはいへ、兎も角も私有財産制度の確立を見た。

右の貿易及び交通の發達並に金融機關の整備、それから古き諸制度の改革によつて、朝鮮經濟近代化の多くの條件が與へられた。かゝる條件の下にその近代化は、如何なる形で、また何人によつて行はれたか。

先づ第一は貿易港に於ける外國商館の設立である。

これに關聯して例へば大倉組の釜山築港事業の如きものがある。山麓の大倉町から埠頭に至るまでの土地は總て埋立てによつて出来たものだといふが、これは當時としては頗る大事業であつたに相違ない。第二は土地投資であつて、既に明治三十年頃から日本人にして農業經營に従事するもの多く、そのやり方に多くの困難を蒙るべき點があつたとはいへ、農事の改良に資本

を授ずるといふことが始つたことは見逃せないところである。第三は近代工業の開始であつて、國內需要に充て若くは輸出する目的を以て、明治三十年頃から小規模工場がポツ／＼現はれ始めた。

而して此等の事業はいふ迄もなく大部分日本人の手によるものであつた。歐米人は鑛山の利權をたゞ獲得するとか、傳道事業に資金を授ずるとかに過ぎなかつた。尤もこの傳道事業が或る種の偉大な力を持つたことは後に大きな問題を提供したが、こゝには述べぬ。

右の日本人の事業も、日韓併合に至るまでは、個別的に見れば頗る小さいものであつた。蓋しその頃まで我國自體が資本の蓄積過程にあり、寧ろ歐米諸國から資本を輸入しなければならぬ時代であつて、従つて朝鮮投資といつても、過剩資本の進出といふ形で行はれたわけではなかつたからである。併し同時に、かゝる時代に朝鮮に乗出して行つた中小資本家の朝鮮開拓の功績——その半面に色々の意味で非難さるべき點もあつたが——はこれを没するを得ないであらう。⁸⁾

かくして開國以後徐々に近代化の方向を辿つた朝鮮經濟は、日韓併合以後急速にその速度を早めた。鈴木教授はその發達を、併合後大正九年に至る第一段階、爾後昭和六年滿洲事變勃發前後に至る第二段階、爾後昭和十二年の支那事變勃發に至る第三段階、更にそれ以後最近に至る第四段階に分つて、極めて要領よく説明して居られるが、そしてその發達の跡は前に掲げた數字によつて大體窺ふことが出来るのであるが、教授が更に『半島産業經濟今日の隆昌は、一つには帝國の政治力に基くものであり、二つには内地資本の移植に基くものであると云ふことが出来る』と述べ、特に前者を重要視して『例へば、内地資本の移植と云ふも、専ら資本の所謂自然發生的自己増殖運動に基いたと云ふよりも、施政當局の積極的吸引に基いた點が頗る大きい』と論じて居られるのは、誠に肯綮にあたる。

朝鮮經濟近代化の狀態は、これ以上の説明を要しないであらう。けれどもそこには尚ほ重要な問題が残されてゐる。朝鮮經濟の近代化は殆ど總て内地人の手に

8) 「朝鮮經濟年報」(昭和十四年版) 31頁以下參照

9) 前掲書、79頁

よつて行はれたが、その間朝鮮人は如何なる役割を果して來たか、といふことは最も重要な問題の一つである。朝鮮固有の經濟と近代朝鮮經濟との接ぎ目はどのやうになつてゐるかといふ問題は、以上くどくどしく述べて來たが、結局こゝに歸着するのである。勿論これに關しては未だ確たる調査研究は存しないやうであるが、見聞によつて得たところを一二記して見よう。

先づ資本であるが、李朝時代に於て資本を蓄積し得べき階級特に兩班貴族は資本を濫費し、ために資本の蓄積は行はれなかつた。更に此等の特權階級は、その特權擁護のために市場商業のみを維持して一般商業を抑壓する方針をとり、ために一般商業は前述の間屋・仲立人によつて可成りの發達を遂げたといへ、それはいはゞ潜行的發達であつて、十分なる商業資本の蓄積は行はれなかつた。かくて主要産業である農業の改良にさへ資本は投下されず、經濟全體として停滯狀態を續けたのである。

勿論地代の蓄積は若干存したであらう。殊に日韓併

合後の土地改革により、從來の收租權者を直ちに土地所有者とする方法が行はれ、耕作農民は大部分小作人とせられた結果、爾後地主の許に蓄積された資本は相當額に上るものと思はれる。けれども彼等は今尙ほ多く地主資本家たるに止まり、若干の者が濁酒醸造業・紡織工業等の諸工業や近代的金融業に資本を投下するに過ぎない。朝鮮銀行調査部の川合彰武氏の推定によれば、現在朝鮮に於ける民間の産業投下資本は、農林・畜産を除けば、四十三億七千二百萬圓に上るが、そのうち半島人資本は四億七千三百萬圓に過ぎず、而もそのうち三億圓は商業に投ぜられ、爾餘の産業投資は、紡織工業に對する四千萬圓を筆頭とする狀態である。かくの如く朝鮮人資本が兎も角も動員せられたのは、恐らく最近の事に屬し、即ち内地人資本による産業の開發が着々その效を顯示するに至つて後のことであらう。

第二は産業そのものに就てであるが、李朝時代に生活必需品は多く家內的自給的に生産せられ、市に於て

取引せられるものが主としてその餘剰品であつたとすれば、その生産が直ちに近代化するのは至難の事柄に屬したといはねばならぬ。前掲崔氏の説明の如く、商人資本が手工業と遊離し獨立して發達してゐた状態に於ては、たとひその蓄積があつたとしても、商業資本の産業資本への轉化は、直ちには行はれ難かつた。かくて古くより有名な平南機業さへ、現在尙ほ農村に於ける家內的副業の段階に止つてゐる。

平南機業は各種の絹・麻及び綿織物並に交織物を生産するものであつて、廣く世に喧傳せられて居り、特に絹織物の一種である徳川亢羅は、鐵道敷設前には安州を中心として全鮮に取引せられ、ために安州亢羅として知られたほどであるから、その生産は自給生産の域を越えてゐたと考へて差支へない。然るにも拘らず、此等の織物は前述の市を通じ若くは卸賣商人の手を経て販賣せられ、そこには未だ問屋制家内工業の段階さへ見られなかつたやうである。

由來、北部朝鮮は南部朝鮮に比して土地が礫礫であ

り、南鮮が畜農業に依存するのに對して、北鮮は多く田（畑のこと）農業に依存した。然るにも拘らず南鮮の農家が貧窮の度高く、土地兼併の弊も顯著であつたのに對して、北鮮の農家が比較的富裕であつたのは、桑・麻・綿などの特用農産物を多く産し、これを原料とする副業的手工業が相當盛んに行はれたからではなからうか。これと、北部朝鮮人が政治的に壓迫されたこととは、相俟つて北部に商業を發達せしめた。然るにも拘らず手工業と商業とは遊離し、兩者が相互援助の關係に於て、相共により高度に發達するといふことは見られなかつた。

かくて朝鮮經濟近代化の過程に於て、朝鮮資本の工業方面への投下が行はれたのは、それ自身の内在的發展の結果でなくて、外部的刺激によつたものであるといふことが出来る。その主たる方面は、前述の如く紡織工業であつて、殊に日韓併合の少し前に始まり、現在全鮮生産額の八割を占めて朝鮮に於ける中小工業界の大宗をなしてゐる平壤の靴下工業の如きは、その典

型的なものである。¹⁰⁾

併し朝鮮資本が最も多く投ぜられてゐるのは、何と云つても商業であつて、前掲川合氏の半島人投資推定額四億七千餘萬圓のうち、商業投資は三億圓を占め、商業投資總額の實に六割を占めてゐる。この事も實は、朝鮮經濟の近代化過程に於て、固有の朝鮮經濟が如何なる段階にあつたかを暗示するものであらう。

第三に市場なる條件を見るに、朝鮮の農家が概ね自給自足の經濟を營んでゐたとはいへ、市に於ける交換が頗る旺盛であつたことは、近代的市场の形成に寄與するところが少くなかつたであらう。この事は、江華開國以來外國貿易が急速に發達し、而も輸出に比して輸入が壓倒的に大であつたことによつても示される。併し乍ら市に於ける交換が現在尙ほ盛んであるところから見ると、近代的市场はかゝる交換が成熟して形成せられたものではなく、寧ろ外國貿易や交通機關の發達によつて開拓せられたものと見なければならぬ。要するに、朝鮮に於ける固有の交換經濟は、近代的市场

朝鮮經濟の近代化に就て

形成のために一定の素地を提供したといふに止まり、決して經濟近代化のための一條件たる役割を果すまでには成熟してゐなかつたのである。

併し兎も角も、この素地に基き、外的諸事情によつて近代的市场が形成せられ、内地資本の朝鮮進出の重要な誘因となつた。勿論電氣事業・電氣化學工業・重工業には他に重要な誘因があるが。

右の市場的條件と並んで、第四に擧ぐべきは勞働力である。前述の土地改革によつて、耕作者の多くは小作人として小耕地に踞踏し、土地改革から直ちに勞働者が發生することはなかつた。けれどもその大なる人口増加率と農村生活の貧窮、殊に南韓のそれは、多數の農民を驅つて、一方には内地及び滿洲への大量移住を可能にし、餘儀なくせしめると同時に、他方には近代産業の發達に應じて、これに多量の勞働力を提供せしめた。即ち近代化過程の朝鮮經濟は、潜在的な人口過剩の狀態にあつたのである。これを動員したものは勿論内地資本であつた。

第五十六卷

五六一

第五號

九九

以上諸々の點を綜合して見るに、朝鮮經濟の近代化は、内地資本と内地の産業形態とを以て、自ら開拓せる半島の市場及び自ら動員せる半島の勞働力に依據して、行はれたといふことが出来る。これに刺戟せられて半島資本も次第に近代産業に向つて動員せられて來た。この間にあつて、商業さへも内地人商業によつてその發達を促されたが、元々朝鮮的に發達してゐた半島人商業は、内地人商業に對し寧ろ優位に立つが如き結果となつたのである。

要するに、未だ封建制度の段階にまでも進んでゐなかつた朝鮮經濟が急速に近代化したのは、内地からの近代産業移植の賜物であつた。そこに大いなる飛躍がある半面に、尙ほ疎隙のあるのを免かれないのは、四方教授の指摘せられる通りであつて、今日内地の經濟統制方式をそのまゝ朝鮮に當嵌める場合に、諸々の缺陷を曝露する所以は、主としてこの點に起因するのであらう。併し兎も角も現在、朝鮮が大陸前進兵站基地として高く買はれてゐる所以は、近代産業の育成に相當の長年月が假藉せられ、内地資本の自由なる進出が許されて、産業各方面が比較的均衡を保ちつゝ大發展

を遂げてゐる點に存するのであらう。

三 餘 言

封建制度の缺如といふことに關聯して、尙ほ一二の見聞を掲げたい。

封建制度の樞軸をなす社會的關係は、土地を媒介とする主従の關係であり、主人と従者との間の御恩と奉公との關係である。この關係は、一方に於て、原始的共同社會から土地と人とを解放し、人類が進歩せる交換社會へ進む過程に於て經過すべき自然的・秩序的な關係であると考へられるが、他方に於て、個人性の自覺乃至完成を促し、自己を主張すると同時に、より上位のもの・より大なるものゝために自己を捨てゐるの精神を涵養せしむる上に與つて力があるやうに思はれる。

右の土地と人との解放、個人性の自覺・完全、そしてその中心的なものへの統合・歸一、これこそ近代的民族・近代的國民經濟の成立に缺くべからざる事柄である。國民經濟なる概念と同様に、民族なる概念は歴史的概念であつて、人種或は種族といふ概念と異なる。

半島人の社會道德、特に恩義の觀念に、内地人のそ

れといさゝか異なるものがあつたのは、民族としての形成の段階に於て、内地人のそれとの間に相違があつたからではなからうか。この相違を生ぜしめた所以は、いふ迄もなく封建制度の時代を経過したか否かに存する。これを經濟の面に限つていへば、固有の朝鮮經濟は、そのまゝで自然的に國民經濟に進み得べき最も重要な要素の一つを缺いてゐたのであつて、その原因はいふまでもなく封建制度の缺如にある。今日半島人の皇民化政策乃至運動が頗る活潑に行はれ、教育・軍事その他あらゆる部面に於て、それは着々効果を收めつゝあるやうに見えるが、その運動に際して、右の歴史性を十分に把握して置く必要があることはいふ迄もなからう。

皇民化政策の一つに創氏の制がある。前に述べたやうに李とか金とかは血統を表示する姓であつて、家を表示する氏ではない。この血統を紐帶とする共同社會を宗中或は門中の制度といひ、半島に於ては、一人罪を犯せば一族これに連坐し、一人顯官に登れば一族その周圍に登用せられ、一人富を累ねれば一族これに寄食してそれを喰潰すといふことが行はれた。今日に於

てもその名残りなしとしない。かくの如きは、個人性の完成は元より、福田博士の所説の如く、戸若くは家庭さへも存しなかつたことを示すものなるが故に、氏がその内容と完全に一致し得るか否かを考へると、創氏の制も簡単に取扱はるべき問題ではなく、こゝでもやはり歴史性の把握といふことが重要になつて来る。

以上の諸問題に關聯して見聞したところは少くないが、民族問題に素人である私は、これ以上書くことを差控へたい。が要するに、李朝末期に至るまで朝鮮は封建制度を缺き、政治・經濟・民族等何れの點よりすらも、そのまゝでは直ちに近代國家に進み得ざる状態にあつた。その近代化は最初から日本によつてなされるべき運命にあり、日本國家の一翼としての近代化し得べきものであつた。而してその事は經濟の面に於て着々實現したことは前述の如くである。政治の部面に於ても同様であらう。併し此等と必ずしも相伴はなかつたものゝ存すること上述の如くであつて、今日盛んに行はれてゐる皇民化政策乃至運動は恰もその點を高めんとするものに外ならぬ。我々はその著大なる効果が擧がらんことを期して待つものである。